SCIENCE COUNCIL OF JAPAN SECTION 1

Newsletter

日本学術会議 第一部担当
〒106-8555 東京都港区六本木 7-22-34
TEL: 03(3403)5706 FAX: 03(3403)1640
E-mail: s251@scj.go.jp

第 23 期第 7 号
2016 年 11 月

目次

■役員交代について■

第一部長　杉田　敦

■新役員からのあいさつ■

第一部副部長　三成美保

第一部幹事　　藤原聖子

■日本学術会議第一部夏季部会　公開シンポジウム■

「続　人文・社会科学と大学のゆくえ」開催報告

第一部前部長　小森田秋夫

プレゼン資料

アンケートから

■日本学術会議第一部地域研究委員会 地域研究基盤整備分科会主催 公開シンポジウム■

「地域研究の意義を考える」開催報告

地域研究基盤整備分科会副委員長　武内進一

■『学術の動向』編集委員会から■

■役員交代について■

第一部長　杉田　敦

定年により退任された小森田秋夫前部長に代わり、第一部長に選任され就任いたしました、政治学の杉田です。微力ながら務めさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

なお、この機会に、恒吉僚子前幹事が、ご勤務先の事情により退任され、新たに副部長に三成美保会員が、幹事に藤原聖子会員が就任されました。引き続きお務めいただく小松久男幹事と共に、新たな体制で役員会として始動しました。第一部所属の井野瀬久美惠副会長とも、従来通り、連携して参ります。部の運営にご尽力をいただいた小森田先生、恒吉先生に深く感謝します。

今期の日本学術会議は、それぞれの専門分野の立場から、当面する諸問題について研究を深める一方で、学術が直面する苦境への対応に追われてきました。

大災害と大事故によって失われた学術への信頼をいかに回復し、社会の中の学術として再出発すべきか。５年の歳月を経て、まだ答は出ていません。

人文社会系の学術に対しては、その社会的な有益性などをめぐり、とりわけ厳しい視線が向けられていますが、これに対しては、人間と社会について根底から考え続けてきた学術が有する固有の意義を、改めて強く訴えるべく、検討を進めているところです。

日本学術会議が全体として取り組んでいる課題としては、さらに、私自身も検討委員会に加わっておりますが、安全保障・軍事研究と学術との関係をどうとらえるかという問題もあります。

これらは、もちろん、それぞれ固有の問題ですが、どのような価値を追求するのか、そして学術がいかなる役割を果たすべきなのかが根底から問われているという点では、一つの大きな問題の分枝であるともいえます。経済的・政治的な環境が困難の度を増す中で、ともすれば、われわれは短期的な利益の追求や、権力への過剰な適応などに向かいがちですが、それで良いのかどうか。

「わが国の科学者の内外に対する代表機関」（日本学術会議法第２条）であり、「独立して」「職務を行う」（同法第３条）機関とされる日本学術会議の本旨をふまえて、何を発信すべきなのか。第一部会員の皆様と共に議論し、考えて行きたいと思っています。

■新役員からのあいさつ■

第一部副部長　三成美保

このたび、杉田副部長の後任として副部長に任ぜられた奈良女子大学の三成です。学術会議のなかで第一部が果たす役割はきわめて大きく、身の引き締まる思いです。

国際社会では、久しく多様性尊重や多文化共生が謳われてきました。しかし今は、排外的な自国中心主義が強まっています。中間層の不満に火を付け、仮想敵への敵愾心を煽りながら、人権をすべて停止してしまったナチズムの狂気を思い起こすのはわたしだけではないでしょう。このような時代だからこそ、歴史と比較をふまえて人間の尊厳や文化の価値を論じ、国家や権力を批判的に検証する人文・社会科学の意義はますます高まっていると思います。

わたしの専門は、ジェンダー研究（ジェンダー法学・ジェンダー史）です。2016 年のジェンダー・ギャップ指数では、日本は 144 ヶ国中 111 位と過去最低を記録しました。政治（103 位）や経済（118 位）での順位が低いのはよく知られていますが、教育（76 位）も決して高いわけではありません。女性の「高等教育の進学」が 103 位にとどまるからです。女子教育がもっぱら「リケジョ（理系女子）」で語られる現状はどこか偏っています。人文・社会科学もまた、女子教育に自覚的に取り組み、次世代に学術成果を伝えて、持続可能な社会を展望する責務があるのではないでしょうか。

意思決定過程に参画する女性の比率が高い国では、軍事費ではなく、教育費の予算が増えるといいます。殺戮ではなく育成に尽力し、対立ではなく未来への希望をつなぐ「学術立国」――それに向けた第一部のみなさまの積極的な活動をお手伝いするべく努力してまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

第一部幹事　　藤原聖子

恒吉僚子先生に代わり、今期残りの期間、幹事を務めることになりました。非力ですが、杉田部長のサポートに尽力して参りますので、よろしくお願い申し上げます。

連携会員には 22 期から、会員には 23 期からと、経験は浅いのですが、それでも小森田前部長がご退任時に指摘された、学術会議の「組織の記憶」と「独立性」という問題の深刻さを痛切に感じています。それらはまた、学術会議での第一部固有の役目にも直結するものと認識しています。編集を担当します本ニューズレターでも、たとえば軍事研究の問題に関しては、学術会議内の過去の議論を資料としてご提供するなどの新企画を検討しているところです。

所属は哲学委員会ですが、その中では社会科学に近い面もある宗教学を専門としています。宗教学が他の人文・社会科学と異なる点の一つは、社会の役に立とうとすると、産学官連携が持ちうる問題に晒される他に、社会運動化することにより（本来、研究対象である）宗教そのものに近づくというところです。これについては宗教学内に賛否両論の伝統があり、議論は「社会的要請の高い分野への転換」を求める動きをめぐって再燃しています。状況は海外でも同様で、アメリカの宗教学会は「世界を救う」宗教学を目指し、対抗してヨーロッパの宗教学会は客観主義を強め、その対立は他の国々を巻き込んで深まるばかりです。そのさなかに置かれている、国際宗教学会の役員としての経験も活かしていく所存です。

■日本学術会議第一部夏季部会　公開シンポジウム■

「続　人文・社会科学と大学のゆくえ」開催報告

第一部前部長 小森田秋夫

1．シンポジウム「続 人文・社会科学と大学のゆくえ」は、以下のような趣旨で開催されました（「趣旨説明」より）。

シンポジウムのタイトルは、「続 人文・社会科学と大学のゆくえ」となっています。「続」というのは、昨年の 7 月 31 日に、この場所で、同じタイトルのシンポジウムを、実際には緊急討論集会という位置づけで実施したことを受けたものです。緊急討論集会としたのは、その 2 ヵ月ほど前の 6 月 8 日に、国立大学法人に宛てた文部科学大臣の通知が出され、この中で、教員養成系学部・大学院、人文・社会科学系学部・大学院の「組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換」が求められたことを受けたものでした。日本学術会議は、この通知を、人文・社会科学を軽視するものと捉えて批判する見解を、自然科学分野を含む学術会議全体の意思を表わす幹事会声明の形で、6 月 23 日に国内外に公表しました。これに続いて、第一部独自の取り組みとして行なったのが、7 月 31 日の緊急討論集会でした。200 名分の資料を準備して臨みましたが、実際には 370 名もの方々にご参加いただきました。
シンポジウムでは、とりわけ、学生・大学院生、その父母の方々、高校教育関係者などから、縁遠いと思われていた学術会議がこのようなシンポジウムを開いたことを歓迎すると同時に、大学の研究者に閉じられた議論ではなく、もっと学生に近づき、学生と一緒に考えるような姿勢を求める声が寄せられました。また、6 月 8 日の通知の直接の名宛人は国立大学ですが、問題は国立大学に限られるものではなく、とりわけ人文・社会科学分野においては大きな役割をはたしている私立大学を含めて考えることが必要だ、とのご指摘もいただきました。他方、人文・社会科学の関係者が集まってその

公開シンポジウム　「続 人文・社会科学と大学のゆくえ」　（2016年8月10日開催）

趣旨説明　小森田秋夫（日本学術会議第一部長、神奈川大学法学部教授）

発題１　人文・社会系「廃止・転換通知」から考える
片山健志（朝日新聞　社会部）

発題２　人文社会科学系「廃止論」の謎―言説の非対称性について―
隠岐さや香（日本学術会議連携会員・若手アカデミー会員、名古屋大学大学院経済研究科教授）

発題３　情報社会の学問的基盤の弱さ
西垣 通（東京経済大学コミュニケーション学部教授）

発題４　境界を越える作業を―人文・社会科学に真に求められているものは何か―
テッサ・モリス=スズキ（オーストラリア国立大学アジア太平洋学群文化歴史言語学部教授）

討論　司会　杉田 敦（日本学術会議第一部副部長、法政大学法学部教授）
司会　恒吉僚子（日本学術会議第一部幹事、東京大学大学院教育学研究科教授）

討論のまとめ　井野瀬久美恵（日本学術会議副会長、甲南大学文学部教授）

重要性を確かめ合うだけでは意味がない、もっと具体性のある議論をしてゆく必要があることも指摘されました。いずれにしても、人文・社会科学の役割やそのあり方について、学術会議が社会の各方面の方々とともに持続的に考えてゆくことが求められていることを改めて再認識させられたのが、昨年のシンポジウムでした。

あれから１年が経ちました。

この１年、日本学術会議は、６月８日の通知をめぐって文科省とやりとりをしました。その結果、通知そのものは生き残っているものの、文科省としては、人文・社会科学を軽視しているわけではない、「社会的要請の高い分野」とは、ただちに自然科学を意味するわけではなく、また「すぐに役立つ実学」のみを重視しているわけでもない、にもかかわらず、人文・社会科学はとくに「教育の面から改善の余地が大きい」ので改革を進めてほしい、というのが通知の「真意」であることが示され、今日に至っています。通知の直接の名宛人である国立大学については、通知以前から準備が行われていたことではありますが、とくに地方国立大学を中心に、人文・社会科学分野に関わる学部・学科の組織の改組が現実に進められています。

というわけで、言うまでもなく議論は終わったわけではありません。問題は、人文・社会科学に対する文部科学省の当面の問いにどう答えるかということだけではなく、そのような問いそのもの、それが出されている今の状況そのものを、より長い時間的射程のなかで、またより広い社会的文脈の中でどう考えるか、ということにある、と私たちは考えています。

もうひとつは、日本学術会議の取り組みです。

第一部では、昨年の秋以来、人文・社会科学の役割、そのあり方についての考え方をまとめ、世に問う準備を進めてきました。現段階の素案が、「人文・社会科学の発展のために―社会の期待に応え、社会を問い直す―」（仮題）という文書です。この文書は、第１に、日本学術会議の従来の見解を再確認することを含め、原則的な主張をひとつの文書に簡潔にまとめ、長く引証されうるようなものとすること、第２に、科学技術政策や大学政策など当面の政策動向に向き合い、言うべきことは明確に言うこと、第３に、従来の見解以上に、できる限り具体性のある提案を含むものとすること、を目標としています。問題は多岐にわたり、また分量的制約があるなかで、これらの目標を十全に充たすことは容易ではありませんが、少しでもよいものとしたいと考えています。今日のシンポジウムも、そのための場のひとつであり、議論を踏まえてさらに推敲を重ねることにしています。

日本学術会議は、「提言」をまとめ、世に問うことを主な活動のひとつとしています。これまでの提言はすべて学術会議のウェブサイトでご覧いただくことができますが、どちらかと言えば、出しっぱなしということが少なくありませんでした。「人文・社会科学の発展のために―社会の期待に応え、社会を問い直す―」は、所定の手続を経て正式の文書としたあと、人文・社会科学の研究者自身はも

170 余名の参加者があった公開シンポジウムの会場（学術会議講堂）

ちろん、自然科学の研究者、学会、学生・大学院生、高校教育関係者、政策当局者、メディアや産業関係者などの間に広め、議論をさらに進め、深めるための手がかりとする努力を行ないたいと考えています。

２．シンポジウムにおける４名の登壇者の方の発言は、要旨以下のようなものでした。

まず、片山健志氏は、6.8 通知をめぐる新聞報道、読者の声、文科大臣の見解を改めてたどったうえで、文系そのものがなくなるかのような誤解を与えたという批判もあったとはいえ、メディアは、危機が迫っていることについて適時に問題提起し、議論を喚起するという役割をはたすことができたのではないか、と述べました。

隠岐さや香氏は、人文・社会科学を批判する国内外、過去と現在のさまざまな言説をとりあげ、それぞれの問題の立て方に批判的な眼を向けながら、人文科学系学部関係者、社会科学系学部関係者、理工系学部関係者、行政関係者のそれぞれに問いを投げかけ、目の前の「役に立つ」に縛られた発想は更なる「想定外」な課題発生への備えを貧しくする危険性がある、と結びました。

西垣通氏は、専門の情報学を例に、文系（メディア論・社会情報学）と理系（情報工学・コンピュータ科学）のあいだに深い断絶があり、それが例えば、2045 年に人間より賢い AI が出現するという、氏から見れば誤った認識（singularity 論）が流布される背景になっていることを指摘し、文理融合的な情報教育の必要性を強調しました。

テッサ・モリス=スズキ氏は、6.8 通知に見られるような人文・社会科学の危機は、イギリスやオーストラリアなど欧米の高等教育機関においても共通に現われており、STEM（Science, Technology, Engineering, Mathematics）に偏った予算配分の結果、大学から人文・社会科学が消えてしまうという警鐘が鳴らされている、と指摘しました。氏によれば、問題の背景には、グローバル化のもとで、教育も利潤追求の道具とされ、研究においても市場的価値を生むテーマが重視されている、という事情があります。知識の商品化は経済の情報化の一側面ですが、知識は自由に複製することができ、消費してもなくならないという特性があることから、知の生産過程には新自由主義的な論理が貫かれるとともに、国家の官僚主義的介入が行なわれるという矛盾があり、そこから、本来の知の生産とは異なる、計算可能なランキングの上昇を国家目標とするというような事態が生じることになります。これに対して、人文・社会科学にとってもっとも重要な問いは「人間であるとはどういうことか？」ということであり、求められているのは、人間のあいだの相互理解を深めることです。そのためには、境界を越える作業が必要です。ひとつは、国家と国家との境界を越えることであり、もうひとつはアカデミアと日常生活との境界を越えること、大学と周りの社会とのネットワークを築き、知を共有しつつ社会的問題をいっしょに解決する、その評価に市民も参加すること、です。モリス=スズキ氏は、具体例として 1920 年に始まった上田自由大学をとりあげ、社会のあり方を「批判的に決定する精神力の育成」を唱えた土田杏村の考え方を紹介しつつ、それこそデモクラシーの中心的な部分であり、そのような本当の意味での「社会的要請」に応えるための教育様式、研究様式を再発明する必要がある、と主張しました。

３．続いて、司会者から、①文系と理系との関係、②人文知の固有の内在的価値、③人文学と社会科学との関係、④研究と教育との関係という論点が示され、会場からの意見も含めて議論が進められました。以下は、その要約です。

もともと文系と理系とは、哲学を基盤として共通の根をもっていましたが、19 世紀に入って分化が進みました。コンドルセは、自然は観察者がその外にあるのに対して、社会は観察者がその中にあるというように、観察者の位置によって自然と社会とを区別しました。大学は統制から自由な哲学という下級学部と社会的有用性に奉仕する神学・法学・医学という上級学部とによって構成されていまし

たが、大学の外で発達した理学が大学に合流し、次いで、市場を背景に実用性を追求する工学と経済学という新しい勢力が参入してきた、と見ることができるかもしれません（隠岐氏）。理学は、自然の中の秩序・論理を探し求めようとし、工学はそれをもとに役に立つものを作ろうとする、社会科学は自分で整合的な概念を作り上げようとするのに対して、人文学は論理的整合性というより、新しいものの見方を切り拓こうとするというように、学問の性格は異なっていますが、今では、理系の人は人社系のものの見方を理解し、人社系の人は理系的なものを理解するように軌道修正することが必要になっています（西垣氏）。また、文系と理系は、入試制度が分けているという面もあります。理系科目が苦手な人が文系に進む、というようになっているからです（片山氏）。

それでは、文理の分化は不可逆的なものであって、文理の融合は不可能ということはないでしょうか。文理の融合として語られているのは、実際には理系による文系の植民地化だということはないでしょうか（司会）。経済的グローバリズムのもとでのメカニックな、計算可能な価値の追求と、それに対する反動としてのナショナリズムに対して、人間的価値を重んじることが必要です。公民権運動をつうじて人間の多様性が承認されてきましたが、ダイヴァーシティの価値を支えたのは、学問的には構造主義言語学、言語多元主義でした（西垣氏）。一体だった文理が分化してきたのは事実ですが、生命とは何かという問いに直面する生命科学、何が許され、何が許されないかを問わざるを得ない遺伝子操作、あるいは温暖化を見ればわかるように、文理を結合しないと悲劇的な事態が生じてしまいます（モリス=スズキ氏）。文理の融合は、上から言われることもありますが、70 年代ごろから、環境学、メディア研究、脳神経科学のように、研究の現場で課題に導かれながら研究内在的に分離の融合が進んできた、という面もあります。ジェンダーは分野を超えて共通理解が可能になっていますし、フィールドをやっていると結合してきます。若手アカデミーでは、まだ理系中心ではありますが、若手の会のネットワークを作りつつあり、課題が生まれればいっしょに動くといく機運が生まれています（隠岐氏）。ただし、文理融合も、教育については研究とは別に考えた方がよいかもしれません。いきなり文理を視野に入れるには能力の限界があり、時間的な制約もあるからです（隠岐氏）。文理を融合させるには、そのためのシステムが必要でしょう（会場）。

教育については、経済界からの批判があります。かつては企業自身が教育していたのに対して、大学により多くを求めるようになり、大学教育と実社会との接点が見えないと言われるようになりました。「G 型大学、L 型大学」論もそのような文脈から出てきた、と考えることができます。新しい種類の大学として「専門職業大学」を設けることが議論になっていますが、実学・技能習得はそちらが担当し、大学でやるのはすぐに役立つ実学とは異なるという整理がされようとしているのかもしれません。いずれにしても、「高大接続」だけでなく「大社接続」、大学と社会との接続が問われるようになっているのです。なぜ人文・社会科学系がことさらに問題にされるかと言えば、大学生の中で人社系の比重が高いこと、理系と比べて研究職に進む人が少なく、すぐ社会に出る人が多いことが理由でしょう（片山氏）。学生は就職に関心があるため実用性を求めている、というステレオタイプがあります。しかし、企業のトップは、実は人文・社会科学の価値を理解しているのではないかと思います。オーストラリアの銀行が基金を作りましたが、そこで重視されていることのひとつは、アジアの文化・歴史の理解です。問題は教え方です。現在、教え方が急速に変わりつつあります。学生に興味をもたせる、考えさせるという方向に変わりつつあります。学生はそれに反応しますし、新しいことにチャレンジすることが好きです。とくに、フィールドワークには人気があり、新しい可能性があります（モリス=スズキ）。

6.8 通知の背景には、80 年代以降、私立大学をたくさん作ったことによる「私立大学のインフレ」、2001 年以降の大学に対する官僚化という流れがあるのではないでしょうか（会場）。確かに、国立大学法人化によって、国家による統制はいっそう強まりました（片山）。人文・社会科学の問題は私学の方が大きいのではないかと思いますが、国立の文系についての文科省の真意はどこにあるのでしょうか？　叩きやすいところを叩くということでしょうか？（司会）。それもあると思いますが、金のかかる理系は国立が引き受けざるをえないが、文系は私立に任せる、という分業的考え方があるよう

な気がします（片山）。議論するさいには、私立大学が大きな比重を占めるという日本の高等教育の構造的特質を踏まえることが必要です。私立大学に対する公費負担は国立の 13 分の 1 に過ぎません。私大教連は、私立も国公立と対等に位置づけることを主張しています（会場）。

文系の廃止・縮小論の背景には、物事を考えさせる人文・社会系はじゃまであるという国家戦略があるのではないでしょうか（会場）。確かに、理系には所与のものを抽象化し、メカニックに処理する、それ以上のことは考えない、という傾向があります（西垣）。判断力については、アンビヴァレントではないかと思います。一方では判断力のあるエリートを必要としていますが、他方では批判力に対する恐れもあるでしょう（モリス=スズキ）。

いま、大学は疲弊しています。学生は学費の負担を抱え、奨学金が問題になっています。研究者は研究以外の業務に忙しく、研究そのものができなくなっています。そのような現状をそのままにしておいて、人文・社会科学を外科手術的に処理したり、文理融合を論じたりすることに危ういものを感じます（会場）。大学自身が商業体になっているという経済構造の問題や政治的自由の問題という本質的に大きな問題があるのに、例えば科学技術史の観点から見ても重要な軍事研究の問題などにはなかなか取り組めないでいる、という現実があります（隠岐）。

※発題者の内、隠岐さや香氏、西垣 通氏から当日のスライドを本ニューズレターにご提供いただきましたので、次に掲載します。

隠岐さや香「人文社会科学系「廃止論」の謎—言説の非対称性について—」9～25 ページ

西垣 通　「情報社会の学問的基盤の弱さ」26～28 ページ

人文社会科学系「廃止論」の謎

言説の非対称性について

隠岐さや香（名古屋大学）

経緯

- 2014年8月4日：文部科学省国立大学法人評価委員会総会「『国立大学法人の組織及び業務全般の見直しに関する視点』について（案）」

「教員養成系学部・大学院、**人文社会科学系**は、組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換」との文言

→一部メディアやSNSで人文社会系批判言説と議論がもりあがる

- 2015年6月8日「国立大学法人等の組織及び業務全般の見直しについて（通知）」

「特に教員用政経学部・大学院、**人文社会科学系学部・大学院**については、18歳人口の減少や人材需要、教育研究水準の確保、国立大学としての役割等を踏まえた組織見直し計画を策定し、組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換に積極的に取り組むよう努めることとする」

→国内外メディアで文科省が人文社会系を軽視と報道される

- 2015年7月23日 日本学術会議幹事会声明「これからの大学のあり方―特に教員養成・人文社会科学系のあり方―に関する議論に寄せて」
- 2015年7月31日（金）日本学会議公開シンポジウム「人文・社会科学と大学のゆくえ」
- 2015年9月18日　日本学術会議の幹事会にて文部科学省の高等教育局長が「新時代を見据えた国立大学改革」を発表

通知は大学の変革を促すのが目的で、人文社会科学系の学問を軽視しているわけではない、とした

「新時代を見据えた国立大学改革」（文部科学省高等教育局）

個人的には真摯に受け止めようとしたが理解の難しい点も多い

「専門分野が過度に細分化されているのではないか（たこつぼ化）、学生に社会を生き抜く力を身につけさせる教育が不十分（学修時間の短さ、リベラルアーツ教育が不十分）」（p.4）

→学修時間の短さは統計的根拠がある。だが「生き抜く力」は多義的であるし検証も困難。「細分化」はどの領域のことを述べているのかわからないが、特に人文社会系ばかりが該当する事柄と思われない。むしろ文学・歴史系など、1970年代以降は学際的分野も増えているが…典拠は学術会議の『日本の展望』（2010）か？

「要請する人材像の明確化や、それとの関連性を踏まえた教育課程に基づいた人材育成が行われていないのではないか」（p.4）

→何故、人文社会科学系だけが特にこれを言われなければならないのかは明確に説明がない。

人文社会系

- 人文学：哲学、文学、言語学*、史学、文化人類学、芸術学…
- 社会科学：法学、政治学、経済学*、経営学*、社会学*、教育学*、心理学*…
- 総合人文社会：ジェンダー学、観光学、地域研究…

【*印は数学（統計など）を使うことが比較的よくある分野】

理工農医系

- 理学（自然科学）：数学、天文学、物理学、化学、地学
- 工学：機械工学、電気電子工学、土木工学、建築学、材料工学、原子力工学…
- 農学：農芸化学、農業経済学、林学、水産学…
- 医歯薬学：医学、薬学、歯学、看護学

【どの分野でも数学は使用。物理、化学や生命科学も広く使われる】

総合系

情報学、環境学、複合領域（科学技術史、脳科学、博物館学、地理学、生活科学、スポーツ科学…）　【文系と理系両方の考え方を使用】

注）作成にあたり文部科学省の科学研究費細目表と学校基本調査学科系統分類表を参考にしましたが、他にも色々な分類方法があります（作成：隠岐）

何か問題があるとは言われてるようだけど…
謎は深まるばかり

理由のわからない批判に対して改善案なんて出せないなあ…かえって不誠実だもの

西山雄二「人文学の後退戦」『現代思想』2015年11月号より

> カントは古典的な哲学的大学論『学部の争い』において、真理の探究を目指して、大学の諸学部同士が合法的な争いをすることを認めていた。**国家権力からの統制を受け、社会的有用性に奉仕する上級学部（神学、法学、医学）とあらゆる統制から自由な状態にあって理性的な判断を下すことのできる下級学部（哲学）のあいだで争いが維持されること**が大学の理想的なあり方であり、その効果は社会にとっても有益である。［...］

カントも国家や資本が学部間の争いを促進するべきとは言っていないようだが…まあ論争自体はしろということだろう

民間企業有識者による人文社会系教育批判言説の例（１）

下村博文文部科学相が全国の国立大学に、文科系の学部・大学院の廃止や社会的要請の高い分野への転換取り組みを求める通知を出した。**まさに我が意を得たり**。昨年、私が文科省の有識者会議で、世界のアカデミア（学問の世界）で戦うグローバル型（G型）大学は絞り込み、残りの大半の大学は**地域社会や経済で実践的に役に立つ人材育成**を主目的とするローカル型（L型）大学を目指すべきだと主張し、ネット上で炎上騒ぎを起こした議論と軌を一にしている。［中略］

インテリ有識者系の人々は、「大学の教養教育で自分の頭で考える力を鍛えよ」と言いたがる。［中略］私が若い時代に学び、あとから役に立ったことの中に、東大の教室［注：法学部1985年卒］で学んだことはほとんどない。**実学的な基礎技能こそが、教養中の教養なのだ**。

［経済観測：役立たぬ「学術教養ごっこ」＝経営共創基盤ＣＥＯ・冨山和彦『毎日新聞』2015年06月12日　東京朝刊］

冨山氏の提案例（2014年10月7日）

L型大学で学ぶべき内容(例)

文学・英文学部	シェイクスピア、文学概論	ではなく、	観光業で必要となる英語、地元の歴史・文化の名所説明力
経済・経営学部	マイケルポーター、戦略論 （筆者は日本のトップ戦略コンサルタントの一人だが、ポーターの5Forcesは使ったことが無い）	ではなく、	簿記・会計、弥生会計ソフトの使い方
法学部	憲法、		道路交通法、大型第二種免許・…許の取得
工学部	機械力学、流体力学	ではなく、	TOYOTAで使われている最新鋭の工作機械の使い方

「実学VS虚学」型

「我が国の産業構造と労働市場のパラダイムシフトから見る高等教育機関の今後の方向性」http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/061/gijiroku/__icsFiles/afieldfile/2014/10/23/1352719_4.pdf

民間企業有識者人文社会系教育批判言説の例（２）

「文学は今の社会とリンクしていないとやる意味がない。シェークスピアを読んで本当に理解しようと思ったら、の時代のヨーロッパの風俗、考え方を理解しないといけない。それは考古学とまではいわないけれど、教養とは言えないと思う。［中略］

シェークスピアよりアリストテレス［の『詩学』］の方が役に立つと思う。シェークスピア作品は物語のモデルになったと言われるが、…い。アリストテレス…)性がある。西欧…の元のモデルは、実はアリストテレスの時代に言われていた、というものがすごく多い。**あれこそ教養です。今でも通用するから。**」

不滅のツール追求型

「川上量生さん『残念ながら日本の教養の原点はジャンプ』」（聞き手・高重治香）『朝日新聞DIGIAL』2015年8月17日

「人文社会科学系廃止」論に対する反応例

- 吉見俊哉『「文系学部廃止」の衝撃』集英社、2016年（文化社会学）
- 室井尚『文系学部解体』角川新書、2015年（美学、記号学）
- 日比嘉高『いま大学で何が起こっているのか』ひつじ書房、2015年（日本文学）
- 『現代思想：特集　大学の終焉——人文学の消滅』2015年11月号（隠岐も寄稿）

おおもとの文書は**「人文社会科学系」全体**を名指していたが、ネットおよびメディア空間での論争は特に**「文学部」関係者**からの応答が目立った（ただし出版時の所属は多様である）

無用の用

創造性の源泉

学問の自由

市場化されない価値

イタリアとフランスで売れた文学系知識人による書物の一節

> 高校と大学は結局の所、企業に変貌してしまったのだ。［…］
>
> 教授達はといえば、彼らは次第に、大学による商業的搾取のための経営に身を捧げる慎ましやかな官僚へと変身を遂げつつある。

Nuccio Ordine, *L'utilité de l'inutile. Manifeste*, Paris: Les belles lettres, [2013] 2014, p. 83.

「文学的教養 VS 知の商品化・産業化」図式

良い議論のためには
文学・思想関連
分野差別の歴史も
知っておきたいね

繰り返される中傷と誹謗

人文系教養軽視で有名な国外の言説

フランスのサルコジ元大統領（2006年当時は内務相）

「先日、私は行政職員の試験プログラムを見て［...］面白いと思ったわけです。サディストか馬鹿者が［...］、受験者に**『クレーヴの奥方』**について質問することをプログラムの中に入れていたのです。［役所の］窓口嬢に、彼女が**『クレーヴの奥方』**について何を考えているか尋ねることってしょっちゅうあるのかどうか、私は知りませんけども...ちょっとそのすごい場面を想像してごらんなさいよ」
［仏『リベラシオン紙』2006年11月21日］

※サルコジ政権は中道右派で**大学改革に非常に熱心**であり、2008-2009年には大規模な学生の反対運動があった

「文学（文芸創作）叩き」自体は
古代にまで遡ることができる
（例：プラトン…法 vs 詩）

どうもすべてそうした類いのもの［詩］は、聴く人々の心に害毒を与えるもののようなのだ。聴衆のほうで、それらの仕事がそもそもどのような性格のものであるかという知識を、解毒剤としてもっていないかぎりはね。

プラトン著、藤沢令夫訳『国家』（岩波文庫）、302

人文系批判言説と差別意識の関係

- 「自由」ゆえに**伝統的に警戒されてきた分野**としての文学、思想とそれを対象にした研究などの分野
- **経済的利益とのつながりが可視化されていない分野**
  - 「科学の経済」研究はあるが「人文社会科学系の経済」研究はほとんど見当たらない（「芸術の経済」はある）
- 社会的マイノリティが多く参画している分野は**その分野を全く理解していない人から一方的に軽視される**ことがある
  - 例：ジェンダー学、クィアスタディーズ、障害学
    2016年2-3月に行ったアンケート調査でいずれも分野自体を軽視する言動があったとの記述回答
    ［隠岐、熊谷、清水、木下、福島、綾屋、星加、中村、大河内（2016、公開準備中）］

理工系分野重視の言説
とその特徴は？
→「危機感」の言説

「危機感」の根拠は不確かなこともある

20世紀英国と「二つの文化」（THE TWO CULTURES）問題の背景

このニつの極端なグループの一方には**文学的知識人**がいる。［…］文学的知識人を一方の極として、他方の極には科学者、しかもその代表的な人物として**物理学者**がいる
［中略］
どうにもこらえきれなくなった私は、彼らのうち何人が、**熱力学の第二法則について説明できるか**を訊ねた。答えは冷ややかなものであり，否定的でもあった。**私は「あなたはシェイクスピアのものを何か読んだことがあるか」というのと同等な科学上の質問**をしたわけである。
［C.P.スノー「二つの文化と科学革命」1959］

スノウは二極化した「二つの文化」を批判しているが、実際には新興国やソ連など共産圏に対抗するため科学技術教育を振興せよ、というのが主張であり「文学的知識人」の方に批判的

英国の場合「シェイクスピア」は伝統的教養に固執する「文学的知識人」＝特権階級の象徴

スノウは労働者階級出身

…で、その後世界は、実際にはどうなっただろうか？

「危機感」の表明とその不確かな根拠

「自国の科学の衰退」を嘆いた人たち

- 1830年　数学者C.バベッジ（英）『イギリスにおける科学の衰退の省察』
- 1871年　ルイ・パストゥール（仏）『フランス科学についての省察』

- **後世から見れば本当に「衰退」していたのかは判断が難しい**

→　実際には英仏でも1830–60年代には重要な科学的発見が相次いでいたから
例：英国のマイケル・ファラデー（1830年代）
フランスの実験医学、微生物学、数学（1860年代）

- 「危機感」の根拠をよりよく説明する要因
  - **他国に比した教育制度の見劣り感、敗戦、経済危機など**

ところで
「社会の要請」と
は、特に誰のこと
を念頭に置いてい
るのだろう？

とりあえず一番
人口規模の大き
い学部生教育で
考えてみようか

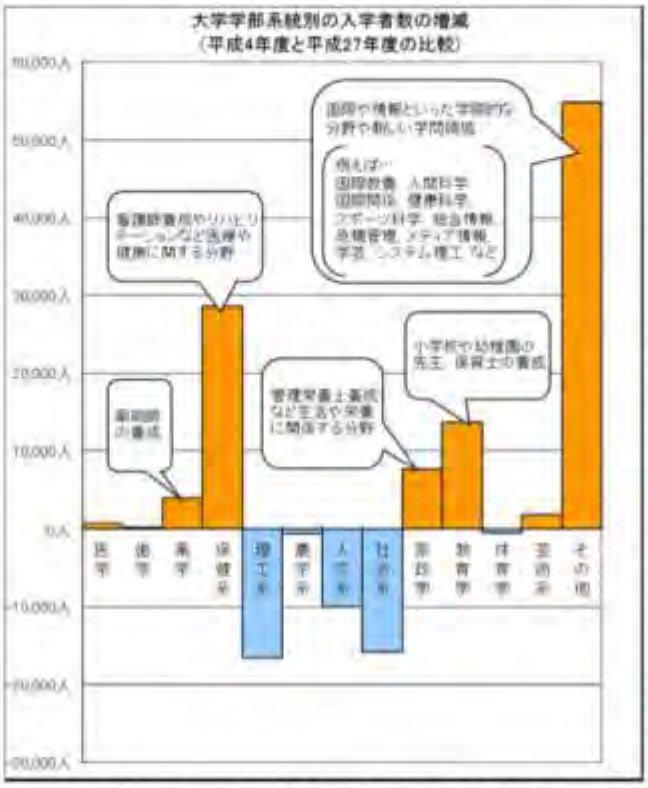
大学入試の2015年：「理高文低」一段落の

「国公立大の語学系統、国際関係学系統は志願者数が増加」

「国公立大の理系では、大きく人気を落とした薬学系統をはじめ、全体的に志願者数が減少した」
※ただし私学の歯学部だけは例外

予備校関連サイトの分析で共通した認識

http://manabi.benesse.ne.jp/topics/01/201507/



（日本私立学校振興・共済事業団『私立大学・短期大学等入学志願動向』より作成）

私立大学では人・社・理・工への入学者数が減り、新分野と教育、医療系は増加

（比較：H4〜H27）

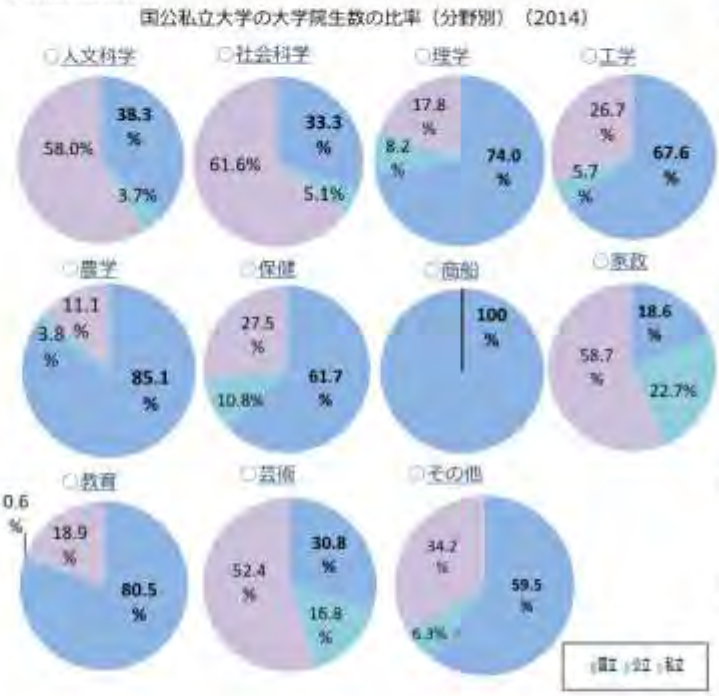
文理含めあらゆる伝統的な学部が「危機」？

ただし大卒割合の増加を考えれば**「大学入学者層の拡大」**が原因の可能性も

大衆化→ニーズの多様化は考慮すべきだろう

学部教育における国立・私立の分業？

●学生数（2）



- 国立大学は理、工、農、商船、教育分野に学生多い
- 私立大学は人文、社会、家政、芸術分野に学生多い
- 人社系の教育自体は私立経営で採算は取れているらしい
- 役割分業があるのだろうか？何故？
- 人社系の「奢侈品」扱い？何故？

人文科学系学部関係者に向けて

- 歴史的経験からすれば時代の変化等をあげて「**危機感**」を**煽る言説については話半分に聞いてよい**気がします。
  →基本は「不確実性の中の意思決定」
- 理工系との連携を頑張るのも一つの道ですが、
  - **若手や在野の研究者の関心を集めて勢いのある言論、思想、文化活動と大学の連携を頑張る**
  - **一般社会向けのコミュニケーションの回路を太くする**

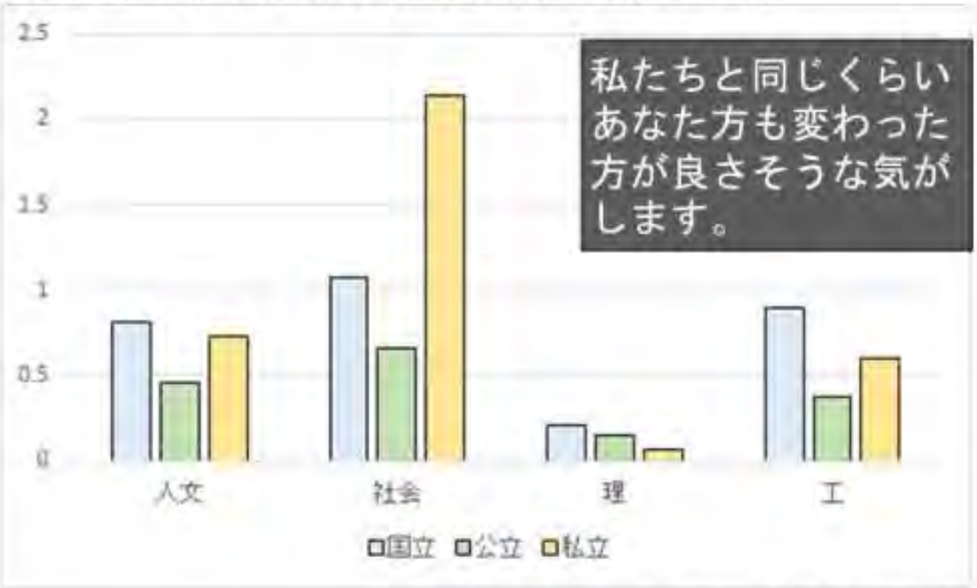
あたりの方がリターンが大きそうな気もします。

社会科学系学部関係者に向けて

- 法学部へ：**人権と「学問の自由」**について考え続けて下さい。
- 経済学部へ：時々、**一部の経済学部出身企業人が人文系教養教育への恨み言を述べている例に出会います**。また、**経済学部生は文系学部の中で一番学びへの意欲が低いという伝説**もあります。一緒にこの問題について考えませんか？
- その他分野の関係者へ：**政治・思想的なポジショニングや、計量的手法との距離感の違い故に**、本気で**言葉が通じないと感じる機会**は、実は理工系よりも一部の社会科学系の方々との方があったりします。難しいけど、**パラダイムの分立は人文社会科学系の宿命です。一つの解を求めない、多様性こそが創造性の源**ですから、きちんと対立を明確にし争い続けるのがよいでしょう。

理工系学部関係者に向けて

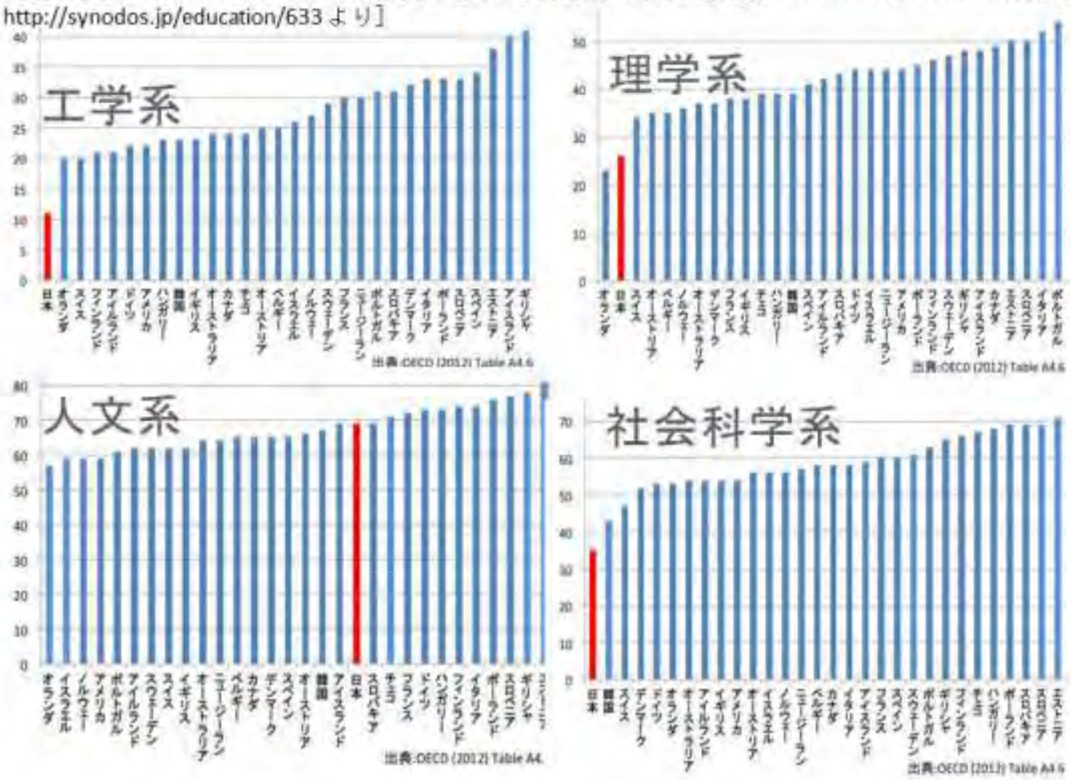
- 教員一人当たり留学生受入数
  ［学校基本調査（2013）より山口博史氏が作成］



http://researchmap.jp/jomu4l8nm-1879826/#_1879

専攻別女性割合国際比較（大学）

［畠山勝太「Education at a Glanceから見る日本の女子教育の現状と課題」『SYNODOS』2012年10月29日 http://synodos.jp/education/633 より］



理工系は誰の要請に応えているのか？

- **国公立大学理学部に留学生が少ない理由**は考察されているのだろうか？

- 理工系に進学したいのに周囲に反対されたり、またはロールモデル不足で自信が持てず諦めるという女子学生はたしかにいる
- しかし女性側からみた場合、教育も研究も「今のままでは魅力的ではない」、すなわち**「理工系が社会の半分を占める人々の要請に充分に応えていない」**ということではないか？

関心を持てるテーマに女子学生は集まる

愛媛大学による花粉症緩和効果のある機能性食品開発のCM

愛媛大学HPより https://www.ehime-u.ac.jp/post-1382/

商品開発に携わった学生全員（15名）が出演

…と、言われたらどういう気持ですか？　＞理工系の皆様

「多様な現場の実態も知らずに、一部の事例をもちあげて乱暴な議論をしている」と思ったのではないですか？

でもそれは、これまでに人文社会科学系がされてきたことなのです。

行政関係者に向けて

➤ これからの課題？

「世界における日本の競争力強化、産業の生産性向上、我が国発の科学技術イノベーションの創出、グローバル化を担う人材の育成、震災の経験を活かした防災対策、地球温暖化等の環境問題への対応、［…］高齢化と人口減少、活力ある地方の創生」
（「新時代を見据えた国立大学改革」p.1）

21世紀の課題は、はたして
これだけでしょうか？

21世紀：
文明史的課題が待ち構えている時代？

- 例：資本主義とそれに伴う格差拡大をこのままにしていていいのか？
- 例：地球の資源には限界があるのに現行の経済成長モデルでよいのか？
- 例：民主主義的意思決定が追いつかなくなるようなイノベーションや、テクノロジーの発展を社会は許容すべきか？

システムの巨大な転換を強いられる可能性がある時代

目の前の「役に立つ」に縛られた発想は更なる**「想定外」**な課題発生への備えを貧しくする危険性がある

でも…そもそも、

全員が「課題解決」のために生きてるわけじゃないんですよね。

あなたはどうしたいですか？

続　人文・社会科学と大学のゆくえ

＊情報社会の学問的基盤の弱さ＊

東京経済大学教授・東大名誉教授
西垣通
（2016年8月10日）

1. 文理の境界線をわたる

・1970s～80s：

東大工学部卒、日立製作所、スタンフォード大学にてコンピュータ工学を研究

・1980s～90s：

明大にてコンピュータ教育、現代思想（フランス留学）、情報社会論を研究

・1990s～：

東大、東経大にて基礎情報学を構築

2. 文系学問は不要なのか？

・理系学問は有用、文系学問は無用という価値観は、どこから来ているのか？

・文系（メディア論・社会情報学）と理系（情報工学・コンピュータ科学）のあいだの断絶

→“情報”イコール“コンピュータ”

・情報工学やコンピュータ科学の基底にある西洋哲学や宗教観の無視

3. 人工知能(AI)をめぐる狂騒

・汎用大型機（理系ユーザ）からパソコンやネット（一般ユーザ）へ

・第3次AIブーム（2010s～）

→囲碁、クイズ、入試問題などへの挑戦

・2045年に人間より賢いAI !?（singularity）

→「機械は思考できるか？」

→「生命知／機械知」を根源的に問え！

4. 情報教育の刷新

・高校の情報教育
　コンピュータ・リテラシー中心
・大学の情報教育
　プログラミングなど情報工学中心
・文理統合的な情報教育の必要性
→　日本学術会議(編)「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準:情報学分野」 2016年3月

5. 参考文献

・レイ・カーツワイル『ポスト・ヒューマン誕生』井上健監訳、NHK出版、2007年
・西垣通『基礎情報学』『続　基礎情報学』NTT出版、2004年、2008年
・西垣通『ビッグデータと人工知能』中公新書、2016年

アンケートから

当日、参加者の方々から寄せられたご意見の一部をご紹介します。

○最後に発言させていただきました。非常に多岐にわたる問題提起、質疑を伺い、これから深める課題の大きさを痛感しています。学術会議の皆様のご奮闘に感謝するとともに、私たちも更なる取り組みを進めたいと存じます。（団体職員）

○今回に取り上げられた問題については、自分でもまだまだ十分に考える必要があると感じられました。そのことに加えて、本日は、どのように考えておられる方がいるのかがわかり、足を運んで良かったと思います。（会社員・公務員）

○いろいろと参考になるご発言を聞き、勉強になりました。文理融合について、研究面と教育面の問題、それぞれ考えさせられました。（教員・研究者）

○ディスカッションの終盤がとても参考になりました。（教員・研究者）

○西垣先生、隠岐先生、モリス先生の発表と 2 部の討論が良かった。文理融合は、上からやるものではなく、自然とつながることが good。 現実の空間、現実の社会問題を共有すること。文系研究者も理系研究者も、おもしろさ（探究心など）を共有すること→現実の社会的課題を共同研究し、解決策を導出すること。これらは自然な流れで可能ではないか。（会社員・公務員）

○大変考えさせられる、有意義な会でした。ありがとうございました。個人的には、追究したいものを追究したい人が追究できる社会であってほしいと願っています。（会社員・公務員）

○文部科学省の職員が出席し、文書の内容について説明をしたことがあり、出席して良かったです。（会社員・公務員）

○各先生方の詳しいお話が興味深かったのと同時に、より大きな視点を知ることができました。ありがとうございました。（教員・研究者）

○「自己言及」の時代というか、「社会」「世間」「文科」「政府」…と様々な関係者、主体の意見が不明確なままに、忖度して議論が進行する。「対話」の成立が困難な時代であるという印象を受けた。その中で、文科省から出席された春山局長(?)の発言は、（あらかじめの仕込みであったとすれば、企画者の手柄）サプライズであった。各々の位置から、可能な限り率直な意見を述べあい、そうした営みが「風通しのよさ」を保ち、自由な社会を守ることにつながればと思う。（教員・研究者）

○羽場先生のご質問はきわめて本質的かつ重要な問題提起だったと思います。この点について、もっと真剣な議論が欲しかったと思いました。（教員・研究者）

○杉田先生のはこび方は中々核心にふれる議論を引き出したのではないでしょうか。報告が短すぎたのが少し残念で、隠岐氏の話をもっと伺いたかったです。文科省の方がご発言されたのには驚きました。（しかし、資料にあった苅谷先生の批判に耐えるものではありませんでしたが。）「学生抜きの大学改革」という井野瀬副会長のことばにも感銘を受けました。教員の都合と為政者の都合がぶつかりあう人文・社会科学論争となってはいけませんね。（教員・研究者）

○プレゼン準備不足では？（隠岐先生以外）　問題提起がかみあっていない。残念です。大学院生にとって既に知っていることが多くて、貴重な場とはなっておりませんでした。ここに来るような人はみな知っていることなのでは？　（教員・研究者）

○各プレゼンターのお話は大変興味深かったが、全体の議論は浅かったと思う。文科省通知に対抗する形で中心的な議論が展開した傾向にあるからと思われる。もっと人文社会科学の①「普遍的な意義」②「現代及び近い将来に対するグローバルな地球社会に対する今日的な価値」③「短期的な具体的課題（学生の減少、経済の不安定さの問題、等）に対する位置づけ」、この 3 つぐらいに分けて、深い議論をすべきではないか。（教員・研究者）

○パネリスト同士の討論があってもよかった。SCJ（日本学術会議）の他のイベントも同様だが、開催の情報発信のあり方に問題がある。HPで告知しているといっても、チェックする者は少ない。広報に注力を望む。（教員・研究者）

○1年経って具体的方策が深められているかと思ったが、あまり深められておらず、問題系のみが漂流している感じ。名大の方の開きなおりは面白かった。こうした開きなおりや茶化しが本来の人文的知、人文精神であるような気がした。そうしたら人文系などますます必要ないが。（教員・研究者）

○反対意見（人文社会科学は不要）について詳しく聞きたかった。反対派の人がいてもいいのではと思った。1人ひとりの発表者の時間が多い方がいいのではと思った。（学生）

○Newsletter も参照させていただきました。本日のシンポジウムを通して、人間形成の教育がヌケているのが問題のように感じました。日本学術会議は科学の手段に基礎を置く会議体であることをよく認識いたしました。貴会議のみでは本件の解決は不可能であると思いました。具体的には、科学でない人間活動を検討する会議体（貴会議にとり異種になります）との検討を始められることです。（教員・研究者、会社員・公務員）

○本質的な議論が不足していると思いました。（教員・研究者）

○第3回を望みます。できれば人社等に限らず、文理融合から大学の教育研究の在り方をテーマにしていただきたい。（その他）

○議題をもっと絞って議論したほうが分かりやすいと思う。（会社員・公務員）

○文科省の役人を交えてのシンポジウムを開催して欲しい。（教員・研究者）

○問題の所在、論点が多様にわたり、議論が拡散しました。考えるべきことが多いのでしかたのないことかもしれません。（教員・研究者）

○問いの深刻さのわりに、時間が十分にとれないことに限界がある。（教員・研究者）

○「大学のゆくえ」についての議論が少なく、残念。また、質問を端折られ、残念。（研究支援者）

○初回シンポジウムの情報を知らなくて参加できませんでしたので、その流れから言えば、若干主旨理解に苦しみました。小研究者の立場から言えば、社会（人文）科学分野の研究の仕方――まだまだ個人研究者の思考を基礎にした研究スタイルが圧倒的に多いし、私たちも何らかの達成感を覚えるものです――共同研究は、これから主流になるべき研究のあり方です。但し、政府国家の政策を論じるテーマでもありますから、バックの顔色を窺いながらの発言には、パワーや改革案、指摘した意見に迫力を感じませんが。（教員・研究者）

○一つひとつのご発題は興味深いものでしたが、昨年から進展があるという感じがありません。人文社会科学の重要性をどのレベルの大学についても完全に否定する人は日本ではむしろ少数派です。今回の6.8通知に象徴される問題は文科省より財務省のしめつけによるものであり、配分できる予算全体が減っているので人社は後回しにせざるをえないということだと思います。ということであれば、社会政策系の研究者に知恵をもっと絞っていただきたい。昨年7月のシンポジウムに比べ参加者が減りましたが、学術会議も結局大したことはできないと見限られてしまうのではないかと危惧します。

○発表者の方々のPPT資料を、後日HP等で閲覧できると嬉しいです。ありがとうございました。（教員・研究者）

○各報告者にもう少し時間を配分してもよかったのではないか。最後の討論（になってないが）よりは…。人文社会系の自画自賛に終わっていたのではないか？文科省あるいは理系分野からの批判を聞くことにより今後の論点が明らかになるのではないか？最初から報告者に彼らを入れておくべき。特に文理の問題については高いところから論じることができる人はいないだろうから。そもそも文科省は文系教育の在り方を問題にしているのではないか？それに答えているか？最後は混沌としたが、少し面白くなった。（教員・研究者）

〇4 つの報告はそれぞれ興味深かったが、各報告の配当時間が短く感じた。特にパワポを使っていて用意した内容を全て扱えず、かつレジュメなどハンドアウトがなかったので、かえってパワポを使わないモリス氏の報告が一番わかりやすかった。人文・社会科学について、かなり具体的で見通しがつくような良いシンポだったと思う。（教員・研究者）

〇シンポジウム内容（議論内容、成果）を、社会に向けて広く情報発信をよろしくお願いします。（会社員・公務員）

〇各組織とも、自分で責任もってやれることを、文書化して、世界に示してください。我々、生きる者は、自分自身で責任もって、選択します。不確実性の中で、多様性、創造性を十二分に発揮していくためには、決めつけないで、選択肢を限りなくふやす事から始めてください！　（自営業）

〇I think that there are no problems with humanities and social sciences. Regarding the university missions, and that covers each field, faculty, department, are as follows: “build” and transmit a scientific knowledge. The true questions are whether Japan needs 800 universities, and whether they need to be bureaucratized according to me.（教員・研究者）［人文学・社会科学には何の問題もないと思う。各分野・学科に共通する大学の使命は、科学的な知識を「作り」伝達することである。私見では、真の問題は、日本は 800 もの大学を必要とするのか、そして大学は官僚化される必要があるのかにある。］

〇日本はまだ学部卒で社会の中枢で働く人々が多いが、他国には大学院卒の割合が多い場合がある。日本は、批判的、critical thinking を必要とする場面が多いので、それを得意とする人々が活躍できるような社会を目ざして教育制度をデザインしていく必要があるのではないだろうか。（教員・研究者）

〇本第 2 回において、フロアからの発言で、本来の問題の本質に一歩近づいた。前回は、被害者側の視点に偏っていたように思えたが、文理分かれて教育を受けた思い込みから脱するためのしかけが、いまだ不足している。橋渡し人材（両方に脚を持つ人材）中心のディスカッションを第 3 回で、望む。学術会議のフォーラム、フューチャーアースの中で、現場教育の中で、片方の教育を受けた Prof. として、考え方が分からないと言われた先生が居たことは、このコメントのベースとなっている。(自営業　デザインエンジニア)

〇総じて、人文、社会科学批判の政治的背景の掘り下げが欠けていると感じた。人文・社会科学は、実社会で「即戦力」として「役立たず」であるがゆえに「無用」とされているというよりも、人文・社会科学が本来持つ「持続的」な「批判力」が「攻撃」に晒され、まさに「排除」されようとしているのではないか。フロア質疑のなかで、「人文社会科学の批判精神が国家にとって『邪魔』なのではないか？」という論点が出されたが、あまり深まらなかった。人文、社会科学の「批判力」は、経済合理性（グローバリズム）、政治情緒性（国家主義）に基づく、たとえば格差社会、原発、安保法制、改憲等の推進にとって「邪魔」なのである。「批判力」という意味では、科学技術の万能性へ疑問を呈するような理科系研究者も当然「邪魔」なのであり、その点では人文・社会科学と自然科学との差はないと考える。フロアから発言した文科官僚の知のあり方こそ、「批判力」を「排除」したエリート教育の成果そのもの！　（教員・研究者）

〇今日は貴重な機会を作っていただいてありがとうございました。問題提起のときに提示していただいた PPT の資料は、とても示唆に富んでおり、この場限りにするのがもったいない気がします。ぜひ配布資料にしていただきたかったと思います。（学生）

■第一部地域研究委員会 地域研究基盤整備分科会主催 公開シンポジウム■

「地域研究の意義を考える」開催報告

地域研究基盤整備分科会副委員長　武内進一

地域研究基盤整備分科会は、2005 年に地域研究委員会が設立されて以降、学問分野としては比較的新しい「地域研究」（area studies）の振興に向けて活動を続けてきた。第 23 期においても、2015 年 10 月にシンポジウム「亀裂の走る世界の中で—地域研究からの問い」を開催し、その成果が日本学術会議がプロデュースする「知の航海シリーズ」（岩波ジュニア新書）として刊行されたところである（西崎文子・武内進一編『紛争・対立・暴力—世界の地域から考える』2016 年 10 月刊）。

同シンポジウムから 1 年を経た 2016 年 10 月、地域研究基盤整備分科会主催の公開シンポジウム第 2 弾「地域研究の意義を考える」を開催した。先のシンポジウム「亀裂の走る世界の中で」が 2015 年 1 月にフランスで起こったテロ（シャルリー・エブド事件）に触発されたアクチュアルな問題設定だったのに対して（詳細は日本学術会議第一部ニューズレター第 23 期第 5 号の西崎報告参照）、「地域研究の意義を考える」と題した今回のシンポジウムは地域研究の足元を見つめ直すことを意図したものであった。以下は、その報告である。

まず、シンポジウムの概要を述べておこう。

①日時：2016 年 10 月 8 日（土）13 時～17 時
②会場：日本学術会議講堂
③主催：日本学術会議地域研究委員会地域研究基盤整備分科会
　共催：早稲田大学イスラーム地域研究機構、京都大学地域研究統合情報センター、地域研究コンソーシアム、地域研究学会連絡協議会
　日本学術振興会科学研究費　基盤研究 A「宗教の政治化と政治の宗教化：現代中東の宗派対立における社会的要因と国際政治の影響」（代表：酒井啓子）、基盤研究 B「現代アメリカ外交の『視座』形成過程をめぐる複合的研究」（代表：西崎文子）
④登壇者とプログラム

趣旨説明　西崎文子（学術会議第一部会員、東京大学大学院総合文化研究科教授）

＜第一部　地域研究からの問い＞
武内進一（学術会議連携会員、JETRO アジア経済研究所地域研究センター長）
「日本の地域研究——その展開、課題、そして可能性」
桜井啓子（学術会議連携会員、早稲田大学国際学術院教授）
「地域を語る——共感と反感のはざまで描かれてきたイラン像」
酒井啓子（学術会議連携会員、千葉大学法政経学部教授）
「地域研究者は戦争にどう向き合うか」

＜第二部　地域研究の実践と理論＞
石澤良昭（上智大学前学長　アジア人材養成研究センター所長）
「文化遺産の修復作業を通じた平和構築と文化復興——カンボジアの事例から」
吉村真子（学術会議連携会員、法政大学社会学部教授）
「地域研究の視点から見る労働——グローバル化、東南アジア、マレーシア」

山越言（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科准教授）
「アフリカ自然保護の現場が要請する地域研究アプローチ――京大のアフリカ研究 60 年の経験から」
佐藤仁（東京大学東洋文化研究所教授）
「地域研究と理論形成」

＜コメント＞
高見澤磨（学術会議連携会員、東京大学東洋文化研究所所長）
木畑洋一（学術会議連携会員、成城大学法学部教授）

＜討論＞

＜総括＞
小松久男（学術会議第一部会員・幹事、東京外国語大学大学院総合国際学研究院特任教授）

⑤来場者数：約 60 名

本シンポジウムの企画は、地域研究者に自分の研究の魅力とともに悩みを語ってもらったら面白いんじゃないかというアイデアから始まった。世界が激しく変動し、日本もそれに無縁ではいられない今日、地域研究の意義が高まっていることは明らかだ。一方で、地域研究に取り組む研究者は、そのなかで様々な課題に直面し、頭を悩ませることがしばしばである。そうした悩みや葛藤は地域研究の魅力と不可分であるから、研究者に自分の研究を振り返ってもらい、これまでの歩みとそこでの悩み、そしてそれに対する考えをざっくばらんに話してもらおうというのが、企画の出発点であった。こうした取り組みを通じて自分たちの営為を客観的に見つめ直し、その魅力を再発見して広く伝えたいと考えたわけである。

冒頭、西崎文子氏による趣旨説明の後、第一部「地域研究からの問い」では 3 名が報告を行った。最初の報告者である武内進一は、日本における地域研究の展開を歴史的に跡付けたうえで、その課題と可能性を論じた。第二次世界大戦後米国で広まった「地域研究」の概念は、日本においては 1960 年代後半から浸透し、特にアジアやアフリカなど発展途上地域の研究が急速に進んだ。70 年代以降、地域研究の名を冠した課程が大学に設けられ、学協会が創設され、日本学術会議にも委員会が置かれるなど、着実に制度化が進んできた。その一方で、研究対象の（発展途上）地域で優秀な研究者が育ったことや、大量のデータを用いた統計分析が発達したことで、伝統的な地域研究の手法が問い直されている。地域研究には、生起した事象を様々な文脈に位置づけて理解する力や、問題になっている地域で問うに値する問いを見いだす力をはぐくむ優位性がある。その点を自覚したうえで、地域研究の手法を再検討する時期に来ているとの問題提起であった。

次に登壇したイラン研究者の桜井啓子氏は、日本と世界の代表的なイラン研究の変遷を跡付け、その変化に日本と欧米で差異があることを示した。日本の場合、イラン研究の量的拡大は顕著だが、日本人による日本のための外国研究という性格に変化はなく、日本語による発信であるため革命後も比較的自由な言論空間が維持された。一方、欧米のイラン研究においては、革命後は在外イラン人による英語での研究という性格が強まり、イラン本国はそれを警戒するというねじれた関係が生まれたことが指摘された。研究成果を英語で発信する傾向が近年強まっているが、どの言語で発信するかは研究内容――少なくとも、その読まれ方――に影響を与える。言語は無色透明なコミュニケーションツールではあり得ないことを改めて思い起こさせる報告であった。

第一部最後の登壇者である酒井啓子氏は、自身の研究対象であるイラクを事例として、「戦争と地域研究」について論じた。地域研究者はふつう、研究対象地域から戦争や政治的抑圧をなくしたいと考える。紛争や抑圧が蔓延する発展途上国を研究対象に選んでいる研究者には、特にそういう気持ちが強い。しかし、現実には、地域研究者と研究対象地域との関係は緊張に満ちている。研究対象地域

の「よりよき状態」を求めるとしても、誰にとっての「よりよき状態」なのかという問題が常に立ち現れるからである。イラクのように戦争が勃発すれば、その問題はいっそう深刻である。研究対象地域に深くコミットするほど、戦争の中で中立という選択肢は採りづらくなる。自分の研究が思わぬところで利用されてしまうかも知れない。地域研究者として真摯であろうとするが故に直面する、厳しいジレンマをめぐる報告であった。

第二部は 4 名の地域研究者が登壇した。石澤良昭氏は、カンボジア・アンコールワットに関わる自身の経験に基づき、文化遺産の修復作業を通じた平和構築の取り組みについて報告した。石澤氏を中心とする上智大学のチームは、1979 年以降、内戦で荒廃したカンボジアでアンコールワット遺跡の修復に着手し、加えてカンボジア人自身の手で修復できるよう人材育成に努めてきた。文化遺産の修復事業は、文化伝承や学術研究発展にとどまらず、民族の誇りとアイデンティティを確立する効果もあった。この事業は、総合的な地域研究の取り組みと言え、地域研究の実践的性格を余すことなく示している。

吉村真子氏は、雇用や労働についてマレーシアを研究してきた立場から報告した。自身の調査に基づいてマレーシアの労働力構造の歴史的変化を論じ、ジェンダーやエスニシティによって労働力市場の分節化が生じていることを説明した。そのうえで、マレーシアでの経験に基づいて、雇用・労働問題に関わる研究の意義や、現地政府や日系企業との関係で研究者として感じるジレンマについて述べた。マレーシアは独立後急速な経済発展を遂げたが、それを単にマクロな数字から捉えるのではなく、そのプロセスにおける労働市場の変容を明らかにしようとの試みは、すぐれて地域研究のアプローチである。それゆえに、政府や企業といった実践的アクターと深く関わり、様々なジレンマに直面することになるのであろう。

山越言氏は、霊長類学から出発して地域研究に転じた自らの経験を踏まえて、閉じた純粋な世界を想定する理系のスタンスと、多様な文脈を取り込み幅広い地域理解を目指す地域研究のスタンスとを対比的に描き出した。ギニアのボッソウ村に住むチンパンジーを研究対象として霊長類学の手法で博士論文を執筆したものの、ボッソウ村の置かれた生態環境をより広い文脈に位置づける必要性を感じ、研究方法やテーマを変えたと山越氏は言う。問題を様々な文脈に置いて考える姿勢は、地域研究の重要な特徴だと改めて感じた。また山越氏は、フィールドでのデータ収集に力点を置く京都大学のアフリカ研究の特徴について、創設者ともいえる今西錦司の研究に遡って論じた。

データ収集の重要性を強調した山越氏に対して、最後に登壇した佐藤仁氏は地域研究と理論形成の関係について挑戦的な報告を行った。C. ダーウィン、今西錦司、J. スコットなどの例に見られるように、重要な理論を打ち立てた研究者は必ずしも長期のフィールドワークを行ってはいない。理論形成において重要なのは、フィールドワークの期間ではなく、理論化しようという意思（ドライブ）に他ならないと佐藤氏は主張した。もちろん、氏の主張は、フィールドワークは短いほどよいということではない。調査の面白さに没入するあまり理論化の努力を怠ってはならないという指摘は、とりわけ社会科学に立脚して地域研究を行う者にとって真剣に考えるべきものだと感じた。

以上 7 つの報告に対して、高見澤磨氏（日本学術会議第一部連携会員・東京大学東洋文化研究所所長）と木畑洋一氏（日本学術会議第一部連携会員・成城大学教授）がコメントした。コメントでは、地域研究をめぐる問題の所在（「地域研究とは何か」といった問題の立て方が有効か）、地域研究と実務・実践との距離感をどう考えるか（地域研究と実践との密接な関係が強調されることが多いが、そのような研究ばかりではない）、戦後先進国研究から始まった地域研究において発展途上国研究が重要になっていったことの意味をどう考えるか、といった論点が提出された。

シンポジウムを通じて筆者が強く感じたことが 2 つある。一つは、地域研究の幅広さと多様性である。地域研究と言っても、専門とする地域や分野によって直面する問題は大きく異なる。研究対象が先進国か発展途上国か、専門分野が人文科学か社会科学か、自然科学の要素をどの程度取り込むのか．．．。こうした違いが研究の手法や目的、そして研究に伴う魅力や悩みにも多様性を与えている。筆者は政治や紛争を主たるテーマとし、アフリカを研究対象地域としているが、こうした筆者のバッ

クグラウンドは地域研究に対する考え方を特徴づけているに違いない。その意味でこのシンポジウム報告も、筆者のバックグラウンドに伴うバイアスがかかっている。

しかし、そうした多様性は必ずしも分裂や発散を意味するものではない。それが、本シンポジウムから筆者が受けたもう一つの印象である。多様なバックグラウンドを持つ論者が報告やコメントを行い、それらが共鳴しあって面白いと感じられ、各人が何らかのフィードバックを得るのであれば、地域研究の看板を掲げる意味は大きい。高見澤氏がコメントで述べたように、我々は「地域研究とは何か」といった問題の立て方から卒業し、多様性の先にあるものを言語化することに努力を傾注すべき時期に来ているのであろう。

なお、「知の航海シリーズ」として刊行された先のシンポジウムに倣って、本シンポジウムの成果をもとに地域研究の魅力を伝える一般向けの書物を企画中である。

（2016 年 11 月 6 日）

■『学術の動向』編集委員会から■

日本学術会議会員・連携会員の皆様

2016 年 11 月 14 日

日ごろ『学術の動向』をご愛読いただき、ありがとうございます。

さて、去る 10 月の学術会議総会でもご報告しましたとおり、本誌がより多くの読者を得られるよう、いま誌面の刷新を進めております。その一環として、下記のようなエッセイならびに新刊紹介・書評の欄を設けることにいたしました。ふるって投稿くださいますようお願い申し上げます。いただいた原稿は、編集委員会で確認のうえ、直近の『学術の動向』に掲載いたします。原稿は、発行元の日本学術協力財団事務局宛にお送りください。

アドレスは、jssf2@ab.auone-net.jp　です。

『学術の動向』編集委員会

〇エッセイ欄（いずれかのサブタイトルをお選びください）

１．科学と社会：2000～4000 字程度

社会における科学と社会のための科学という観点から、読者の関心を喚起するようなテーマについて、自由にご意見を述べてください。

２．学術からの発信：2000～4000 字程度

社会的あるいは学術的に重要なテーマについて、科学者・研究者の立場から自由にご意見を述べてください。

３．学術の今日と明日：2000 字程度

ご自身の研究分野の現状や展望について、日々出会うさまざまな問題について、自由にご執筆ください。

４．私が研究者になるまで：2000 字程度

研究者となることを志したきっかけや動機、研究者となるまでの道筋についてご執筆ください。

５．随筆：1000～2000 字程度

現代に生きる科学者・研究者として日々感じられることを自由にご執筆ください。

〇新刊紹介・書評欄：専門分野の別を超えて、広く読まれるべき本をご紹介ください。

・新刊紹介：1000～2000 字程度
・書評：2000～4000 字程度